

自己と世界をつなぎながら〈他者〉を楽しみ続ける授業の構想 —第6学年『鳥獣戯画』を読む—を通してアート・コミュニケーションを学ぶ—

羽島 彩加

1 はじめに

令和6年度は、本校の研究である〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成を、国語科では、「論理」を切り口にしたカリキュラム構想を行うため文学を中心に研究を進めてきた。その一方で、国語科の授業と他教科との連動を図る中で、文学に限らず、他のジャンルも幅広く扱いながら援用できる方法を探ってきた。

本研究では、他教科との連動を視野に入れながら「論理」を切り口とした説明的文章を読むことで〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成を目指した実践研究を行い、考察することにした。そこで、本研究では、自己と世界をつなぎながら〈他者〉を楽しみ続ける授業を構想した。

2 自己と世界をつなぐための連動

(1) 「読むこと」を通して世界に向かう姿とは

梶田(2019)は「真の『学びに向かう力』の基盤にあるべきものを考えるなら、それは「自分自身にとっての〈現実〉に根ざし、自分自身にとっての〈真実〉を求め続ける」力であると言ってよいだろう。この意味での『学びに向かう力』は、自分自身の生涯を自分の責任において生き抜いていく力ということにもなるのである」(pp.6-13)と述べている。このことから分かるように、学びに向かうことから学びを続けること、学びを広げることなど、生涯の学びに対する情動や情緒や、多様性を受け入れながら社会・世界に関わろうとする力を育成するための研究が求められる。

これらのことから、本研究では、小学校国語科の読むことにおいて、学習者に「世界に向かう力」を培うことにより、予測不可能な多様な社会の中におい



(図1)「読むこと」を通して世界に向かう姿

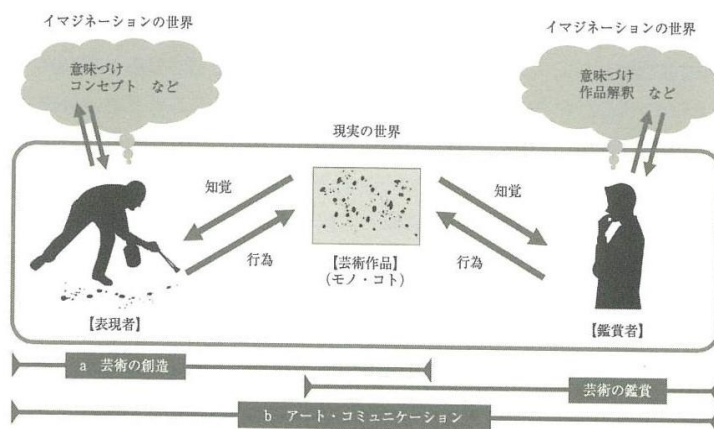
ても、それぞれの課題と向き合い、解決していくことに寄与できる学びを追究する。

そこで、本研究では、「世界に向かう力」を「他者とつながり試そうとする力」と設定し、「読むこと」を通して、世界に向かおうとすることを狙う。その際、多様な〈他者〉に出会い、受容しながら学ぶことは必要不可欠である。また、本研究における児童の学びの姿のモデルを図1とする。

(2) 「読むこと」を通してアート・コミュニケーションを学ぶ

岡田・縣(2020)は、アート・コミュニケーションを、作品を中心とする芸術の創造と鑑賞のプロセスにおけるイマジネーションの世界のコミュニケーションとして図式化している(図2)。

この考え方をを用いて、自己内対話を行うアート・コミュニケーション、学習者同士のファシリテーションで行われるア



(図2) アート・コミュニケーションのモデル (岡田・縣 2020)

ート・コミュニケーション、「読むこと」を通して「作品の知識や情報」を取り入れて行うアート・コミュニケーションと段階を明確にして研究を行う。

3 単元デザイン

(1) 単元について

本単元は、「この絵をどう見るかについて語り合おう」という単元で、「『鳥獣戯画』を読む」を教材とした説明的文章を読むことの単元である。本教材は、鳥獣戯画の一場面を筆者の見方で解説し、絵巻物の表現の素晴らしさについて、筆者の挙げた観点をもとに説明した文章である。筆者は、絵の中の動物の様子や描き方、そこからイメージされることなど筆者のものの見方を示し、絵の評価をしている。そこで、その筆者の評価は、何を根拠にしたものかを考えながら読むことができる教材である。また、本教材は、読者への呼びかけや体言止めなど、読者を引きつける表現の工夫が数多く使われており、筆者の評価を強く印象づける効果が使われている。さらには、絵の情報と筆者のものの見方を交えて説明していることから、筆者をファシリテーターとしてアート・コミュニケーションをするように、「鳥獣戯画」と学習者、筆者と学習者、学習者同士の対話ができると考えられる。そこで、アート・コミュニケーションを行い、「この絵をどう見る」についての鑑賞者としてのものの見方の獲得と、文章を読む中で論理的に解釈しながら読むための読み方の獲得の両方を狙う。

本学級の児童は、これまで説明的文章を読むことや伝記を読むことを通して、それぞれの筆者がどのような立場でどのようなものの見方で説明をしているかということを読んできた。そこで、少しずつ書き手である筆者の立場を意識しながら、説明の仕方やその主張に対するその自分の考えをもつことができるようになってきた。しかし、今回の学習のように、筆者のものの見方からその手法を学ぶような読み方は行っていない。そのため、絵と文章を結び、筆者のものの見方から、どのように絵を見るかについての方法を学ぶとともに、それがどのように説明されているかを読む中で筆者の論の展開の仕方を捉え、論理的に解釈しながら読むことに向かわせたい。

本単元では、第0次で自分と読むことを近づけるために、筆を使って絵を描くことを造形や書写で行い、表現者の体験を行う。さらに、鳥獣戯画の絵巻物のレプリカを見せ、自由に鑑賞し、鑑賞者の体験を行う。第1次では、まず題名読みを行い、「『鳥獣戯画』を読む」を読み、自分の中で生まれた問いを交えながら初発の感想を書かせる。それをもとに学習計画を立てる。そして、第2次では、「『鳥獣戯画』を読む」の筆者をファシリテーターとして、文章を論理的に解釈させながら、絵の見方を学ばせる。その際、筆者の説明の仕方や文章の構造にも着目させ、「論理」を読むことにも向かわせる。そして、第2次の終わりにそれまでの学習を踏まえて、アート・コミュニケーションに大切な観点を見つけさせ、第3次への足掛かりをつくる。さらには、第3次では、葛飾北斎の富嶽36景から自分の好きな絵を選び、鑑賞するとともに、自分の好きな北斎の作品を紹介し合う中で友達とアート・コミュニケーションをして、自分のものの見方・考え方を示しながら鑑賞することで学習をまとめる。

(2) 単元の目標

- 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し、使うことができる。【知識及び技能】
- アート・コミュニケーションをするために、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、筆者のものの見方を捉えたりすることができる。【思考力・判断力・表現力等】
- 文章を読んで考えたことを伝え合おうとすることができる。【主体的に学習に取り組む態度】

(3) 単元計画（全6時間）

第0次 アート体験をする。（造形科「墨で描いた絵」「ドームがたり」）

第1次 題名読みをして、初発の感想を書く。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2次 筆者とアート・コミュニケーションをする。・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

①「筆者は何をどう見ている？」について話し合う。

②「筆者の絵の見方のどこに説得されたか」について話し合う。（本時）

③筆者からアート・コミュニケーションを学ぼう。

第3次 好きな作品でアート・コミュニケーションをする。・・・・・・・・・・ 2

①好きな絵を選び、自己内対話でアート・コミュニケーションを行う。(書く)

②友達とアート・コミュニケーションを行う。(話す・聞く)

単元後 自分の作品を持ち寄ってアート・コミュニケーションをする。(造形科「ドームがたり」の作品鑑賞)

4 本時について

(1) 本時の目標

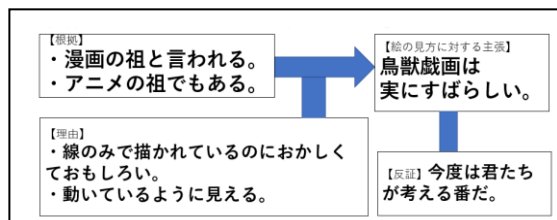
○ 筆者の絵の見方や説明の仕方から筆者の論理を捉え、自分のものの見方に生かすことができる。

(2) 本時の学習過程

学 習 活 動	指 導 の 意 図 と 手 だ て	評 価 の 観 点
1 前時の学習を想起する。	○ 前時に出了筆者の絵の見方について想起させる。	○ 前時の学習について想起することができる。
2 本時の学習課題をつかむ。	○ 本時の学習課題を提示する。	○ 課題をつかむことができる。
「筆者の絵の見方のどこに説得されたか」について話し合う。		
3 自分が説得された筆者の絵の見方について考えをまとめる。	○ 筆者の絵の見方のどこに説得されたかということを考えさせる。(根拠と理由)	○ 自分の考えとその理由について書くことができる。
4 グループで考えを交流する。	○ 筆者の絵の見方についてそれぞれの考えを伝え合い、共通点と相違点を考えさせる。	○ 考えを交流する中で論理的に解釈をしながら、筆者の絵の見方について評価することができる。
5 「相手を説得するような見方で話すためには？」について考える。	○ 絵の見方とその説明の展開の仕方に気づかせるとともに、アート・コミュニケーションに向かう考え方を引き出す。	○ 絵の見方とその説明の仕方のよさに気づき、自分に生かそうとすることができる。
6 学習をふりかえる。	○ 本時の学習で学んだことから、アート・コミュニケーションに活用できることを考えさせる。	○ 本時の学習で自分が分かったことをまとめることができる。

5 本時の授業の実際

本時は、第2次の2時間目の「筆者の絵の見方のどこに説得されたか」について話し合う授業である。本時の「対象の



(図3) 本時の「対象の論理」

論理」は、図3の通りである。

本時の導入では、前時の学習で、教科書の挿絵として用いられた3枚の絵を筆者がどのように見ているかについて振り返らせ、その中でも自分が説得させられた見方について、考えることから始めた。それぞれの考えを書いた後に、班で話し合わせ、それをもとに、他の班の考えを聞いたり、自分の班の考えを伝えたりするバズ学習を行った。班の交流の後で全体交流をする中で、学習者は、テキストの絵の見方の書き方に着目し、絵の細かい部分について解説している段落と全体を見て解説している段落があることに気づき、自分たちがどういう見方に説得させられたかについて考えていった。その様子は次の通りである。

T1:どこに考えがあると思ったの？

C1:7段落とかに多かった。

T2:7段落とかに筆者の考えが多かったと思ってここに納得していたわけね。だけど？

C2:場所は同じだけど、場所は同じでも、それがこう納得しているから、ここは、7段落と全体のまとめになっているとか考えた。

(中略)

C3:5・6・7段落が全体と言っているけど、5段落は挿絵2の方のカエルの気合の声の説明だと思うから、結局ちゃんとした全体は、6段落も一応わきあいあいとした遊びっていうのは挿絵3の説明にもなるけど、本格的な全体は7段落かなと。

T3:C3君はこんなふうに言っていますけどどうですか？

うんうんと言っているC4くんどうですか。

C4:5・6段落は、全体のまとめにいくまでの鳥獣戯画の『鳥獣戯画』を読む」という筆者の考え。

T4:どうのこと？

C5:鳥獣戯画をそのまま絵として見るんじゃなくて、アニメとか漫画とか。で、今でいう吹き出しとか表現とか、そういうものに例えているっていう考えを述べて、7段落で両方の絵を受けて、それはこうですよっていう感じで。

T5:何を受けているって？4・5をどこが受けているの？もっかい言って。

C6:だから5・6段落で、今でいう漫画のコマづかいを表現していて、その中にはカエルの息づかいとかそういったものを表現についてまとめられていて、最終的な段落で、ここここを受けて、こうなりますよねってなって、ここからこう見る(挿絵3)と時間が経っている、今でいうアニメにもつながりますよねって、筆者が言っている。

(中略)

T6:ということは、みんなが説得させられるためには、どんなことが大事なの？いろんな人が聞いていて、ああ分かりやすいっていうふうに納得するためには、どんな要素がいるのかな？

C7:見方のところに説得されたかといえば7段落の「3びきのカエルは一枚の絵だからと言ってある一瞬をとらえるのではなく、次々と時間が流れていることが分かるだろう。」のところが結構。

T7:ここはみんなが納得しやすい場所ってこと？でもここだけで納得できる？

C8:この一番言いたいことって、考えている、みんなが納得した7段落は、1～6段落ではそれぞれのウサギとかカエルはこんな動きをしてそれぞれの行動とか意見とか想像していることがはっきりしているから、その「一枚の絵だから一瞬をとらえているのではなく次々と時間が流れていることが分かるだろう」というのが来たときに、ああそうなんだなと納得ができるんだと思う。

T8:筆者が想像したことがまずはっきりわかる。これが大前提としてあって、こう書いてあると納得みたいなことになるってことね。なるほど。他にありますか。

C9:それもあるけど、最後の7段落の最後の文で「それぞれどういう表現か、今度は君たちが考える番だ」というので、自分の思ったことを全部言った後に「君たちはどう思うか」ということを言うと、それで「どうなんだろう」と考えて、もう一回読み返したりするから、そしたら、また、やっぱり納得しやすいようになっていくのかなと思う。

このように、学習者が交流によって、筆者の絵の見方の観点として、細かい部分と全体を解説する見方に気づき、筆者の説明の仕方の工夫として、筆者の考えを述べることに読者に考える余地を残すことの両方を書き、それが説得力を増しているということに気づいていった。

学習の振り返りには次のような記述があった。

最初に簡単な導入をして、後で詳しく説明したり、抜すいして説明すしたりすると分かりやすくなりそう。伝えたいことのために必要そうな情報を提示して根拠を明確にすることも大事。

6 本時の考察

本時では、筆者の絵の見方のどこに説得されたかを考え、話し合う中で、筆者の絵の見方や説明の工夫に気づき、「筆者の論理」を捉えようとする姿が見られた。また、考えを交流することで、絵の見方の観点や絵の説明の仕方の工夫に気づき、これらは、新たなコミュニケーションの方法であるアート・コミュニケーションに気づくことができたと言える。

7 おわりに

本単元では、第2次で本時にもあるように筆者の絵の見方や絵の説明の工夫を読む中でアート・コミュニケーションを学び、この学びを活用しながら、〈他者〉を楽しみ続けることを狙い、学習者がこの単元を終わっても自己と世界をつなぎながら学び続けることを構想した。第3次では、葛飾北斎の富嶽36景から好きな絵を選び、自分の鑑賞文をもとに、アート・コミュニケーションを行った。本単元を本校の研究で行っている年間2回の「ヒロガルブック」にこの学習を取り上げた児童の中には、単元直後に書いた「ヒロガルシート」には詳しく書かれていなかった、本時の学びの詳細についても「例えば相手に考える余地を与えるなど」という、コミュニケーションの方法を例に出して記述し、「高畑勲さんの書き方をヒントに文を作り、伝え、話し合うことで、アート・コミュニケーションという力をつけることができました」という学びが表現し、「これからの社会で必要なコミュニケーションを使っていきたい」と自立した学習者の姿が見られた。ここから、アート・コミュニケーションを活用することで、学びの意義を感じたり、これからも使おうとする意欲につながったことが分かる。これは、学習者が、他教科との連動の中で、「筆者の論理」を読むことで獲得した力を活用することによって、新しい価値を見出すことができた一例だと言える。

このように、本研究は、筆者の論理を読むことによって、新たなコミュニケーションの方法であるアート・コミュニケーションを学び、学びの連動の中で、自己と世界をつなぎながら〈他者〉を楽しみ続けることへのアプローチの一つであると考える。

【参考引用文献】

梶田叡一（2019），『学びに向かう力 学習活動を支える情意的基盤を』，金子書房，pp.6-13

難波博孝（2018），『ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業—国語科で論理力を育てる—』，明治図書

平野智紀（2023），「鑑賞のファシリテーション」，あいり出版